

親との関わりが日中大学生の他者志向的動機づけに与える影響

周 子 康

Abstract

This study aimed at examining whether relations with parents affect the other-oriented motivation of Japanese and Chinese university students. 268 Japanese and 201 Chinese university students were contrasted via survey to explore cultural differences. The results suggested that Japanese and Chinese students with a mutual-negotiation father who was high on both individuality and connectedness scored higher on the students' motivation types of emphasis on self-oriented motivation and the integration of self-oriented motivation and other-oriented motivation. On the other hand, only Chinese students with a mutual-negotiation mother who was high on both individuality and connectedness scored higher on the students' motivation type of negative recognition of the emphasis on self-oriented motivation.

キーワード……親子関係 コミュニケーション 日中比較

1 問題と目的

親子間のコミュニケーションは家族と一緒に生活する中で日々経験している交流のひとつである。その交流の性質は、子どもの動機づけに大きな影響を与える（宮本，1981；東，1981；東，2012）。親との関わりから生じる動機づけについて、東（2012）は、「周りの人々、特に強い相互依存で結ばれた親、妻子その他身近な人々の期待を感じとり、それを自分自身のものとして内面化したものが原動力になる」と日本人特有な動機づけであると解釈していた。

この日本人特有な動機づけについて、伊藤（2012）は「自己・他者志向的達成動機」尺度を構築した。彼は達成行動における動機づけを「自分のため」（自己志向的動機づけ）と「他人のため」（他者志向的動機づけ）を区別し、他人のために動機づけられている時でも、達成行動と学習行動へ肯定的な影響を及ぼすことを明らかにした。一方、他人のために動機づけられることは否定的な影響を及ぼす場合もある。例えば、他人のために対する否定的な認知（「周りの人のために頑張る」という考え方は、結果がでないと「申し訳ない」と思ってしまう負担である）である（伊藤，2012）。また、動機づけを自己決定性の程度から捉えようとする自己決定理論では、親との関わりに関する動機づけは外発的動機づけの「取り入りの調整（周りに無能だと思われたくないから；友達に負けたくないから）」と「外的調整（親に叱られるから；先生にやれといわれるから）」とする自己決定性の低い動機づけとして位置づけられている（鹿毛，2012）。

このように、先行研究において親との関わりが青年の外発的動機づけと内発的動機づけを促

進するという矛盾する結果が得られた原因は、青年の自律性を支持することの有無によって生じうると考えられる。真島（1995）は自己決定的でありながら、同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続けるといった意欲の存在を指摘している。これは、他人のために動機づけられることにおいて自己決定、つまり個人の自律性の有無の重要性を示唆している。

自律性は、親と一緒に居られる時の安心や居心地の良さ、信頼できる関係の形成、親に期待されているという感覚、成功した時の承認と受容や失敗した時の励ましのフィードバックから、親との関わりの中で動機づけられ、発展していくと考えられる。また、親子間の相互作用の特徴と青年のアイデンティティ探求、自我発達との関連に関する先行研究（Cooper & Grotevant, 1987；平井・久世・大野・長峰, 1999；平井, 2000）では、他者との相違と他者との結びつきの両方が青年の心理社会的発達において重要であることを示唆している（高橋, 2008）。例えば青年期の親子間のコミュニケーションの特徴として、Grotevant & Cooper（1986）は「独自性」と「結合性」を取り上げている。独自性とは他人に対して自分自身の意見や視点をはっきり伝えること、または自他の相違を表明することである。一方、結合性は他人の意見に対する同意や認め、さらに尊重し結びつきの感覚を示すことである。中野（2013）は進路決定の際に、親の考えの違いを明確にする関わりを持つこと、他者から区別された自分の立場を明確にし、親が青年を励ましつつ、肯定的に支持される環境、すなわち独自性と結合性がともに表出されることが学生の進路自己決定性、自律的な動機づけの高さと関連することが示された。要するに、親が青年に対するコミュニケーションの特徴である独自性と結合性は青年の自律性の発達に関する重要な要因だと考えられる。

また、青年期は、親からの心理的独立を達成する時期である。井上（1995）は、青年が、親に対して依存もしくは独立欲求のみ抱くのではなく依存・独立欲求両者を抱いていると考えられ、着目すべき点は依存・独立欲求の抱き方であると指摘している。つまり、親とのコミュニケーションが青年期の動機づけに及ぼす影響を検討するにあたって、独自性・結合性に着目することで青年の自律性に対する理解が深まると考えられる。

これに関し伊藤（2010）は、親との良好な関係の中で他者志向的達成動機が獲得されることを示した。さらに、親に期待される経験も、他者志向的達成動機を獲得する源泉と考えられている。伊藤（2010；2011）は親子関係が他者志向的動機づけに及ぼす影響について、大学生を対象に、親の養育態度、親から期待される内容及び大きさの認知、親の学業への関わり方などに着目し検討した。しかし、先に指摘しているように、青年期の特徴として、青年が重要な他者に求められている独自性と結合性を表す親子間のコミュニケーションについてはまだ検討されていない。

また、他者志向的達成動機が内発的動機づけとうまく統合している状態が望ましいと考えられている（伊藤, 2014）。伊藤（2014）は自己志向的達成動機と他者志向的達成動機の統合が他者との良好な関係の中で他者に期待されたり、感謝されたり、あるいは他者に対する感謝する

気持ちの経験の中で形成されると確認した。しかし、これらの経験は、主にコミュニケーションを通じてなされているため、コミュニケーションが自己志向的動機づけと他者志向的動機づけの統合をどのように促進しているのかも明らかにする必要があると考えられる。

本研究では親とのコミュニケーションの特徴の中で独自性と結合性を取り上げ、他者志向的動機づけとの関係を検討する。具体的な質問項目は、高橋（2008）が作成した進路選択時の親子間のコミュニケーション尺度の中の「独自性」と「結合性」に関する項目にした。進路選択時の親子間のコミュニケーションを取り上げた理由は、1 つは進路選択において親が青年に強い影響を与えているからである（矢崎，2005）。自己決定理論では、重要な他者の存在や他者との関係性によって外発的な動機づけが自律的な動機づけへと変化すると仮定している。重要な他者により関わっている進路選択時において親が青年の動機づけに影響する可能性があることを示唆されている。

また、他者志向的な考え方が、日本社会において独特な動機づけ方とは考えにくい。同じく人間関係を重視し、他者と密接に結びついている中国社会では他者志向的な考え方が存在することも考えられる。北山ら（1995）は日本をはじめとする東洋文化圏では、「相互協調的自己観」という、他者や周りの事柄と深く結びついていく生き方が重要だと考えられると指摘した。日本と隣接する中国でも、同じく「相互協調的自己観」が重要であることが示されている（高田，1997；Markus & Kitayama，1991）。しかし、同じ文化圏内における下位文化の比較研究の知見から、同じく相互協調的自己観が優勢である日本と中国でも、相互独立的自己観、つまり自己を他者とは区別され分離されたものと理解することに対しては、日本人より中国人のほうが有意に高いことが示されている（高田，1997）。こうした相互独立的自己観の違いが親子間のコミュニケーションの特徴にも反映され、日本人より中国人の親のほうが、独自性を強く持つ可能性があり、動機づけにも影響を及ぼすと考えられる。また、相互協調的自己観は日中ともに重要であるため、結合性においては、日中間に差がないと考えられる。

そこで本研究は日中比較をすることで、両国の差異を検討していく。そして、日中比較の観点から、親との関わりにおけるコミュニケーションの特徴として「独自性」と「結合性」を取り上げ、他者志向的動機づけに対してどのように機能しているのかを明らかにする。

2 方法

2-1 調査協力者

日本の新潟県内の国立大学の日本人大学生 288 人と、中国の広東省内の師範大学の中国人大学生 241 人を対象に質問紙による調査を実施した。欠損値があるものは除外したために、本研究では日本人大学生 268 人（男性 96 人・女性 172 人。1 年生 117 人・2 年生 104 人・3 年生 28 人・4 年生 19 人）と中国人大学生 201 人（男性 122 人・女性 79 人。1 年生 36 人・2 年生 65 人・3 年生 63 人・4 年生 37 人）のデータをもとに分析を行った。

2-2 調査時期と調査内容

親子間コミュニケーション尺度：高橋（2008）の進路選択における親子間コミュニケーション尺度を使用した。本尺度は、コミュニケーションにおける他者からの分離と他者との結びつきの2つの側面である「独自性（6項目）」と「結合性（3項目）」から構成される。「普段の家庭生活で、母（父）親と進路選択の話をする際の様子についてお聞きします」と教示し、「1. 全くその通りだと思う」「2. そう思う」「3. どちらかというと思う」「4. どちらとも言えない」「5. どちらかというと思わない」「6. そう思わない」「7. 全く思わない」までの7件法で実施した。

他者志向的動機づけを測定する尺度：伊藤（2010）による自己・他者志向的動機づけ尺度を使用した。本尺度は、「他者志向的動機づけの優先（5項目）」、「自己志向的動機づけの優先（5項目）」、「他者志向的動機づけの否定的側面の認知（5項目）」、「他者志向的動機の自己志向的動機への還元（5項目）」、「自己・他者志向的動機の統合（5項目）」から構成される。「大学での勉強の動機についてお聞きします」と教示し、「1. 全くその通りだと思う」から「7. 全く思わない」までの7件法で実施した。

なお、中国人大学生に配布した調査票は、筆者が元の日本語の項目を中国語に翻訳した。また、これを日本人の大学院生に日本語に翻訳してもらい、元の日本語の項目と照らし合わせた結果、内容はほぼ一致していたため、筆者が中国語に翻訳したものを中国人大学生に配布する調査票として使用することとした。

2-3 調査方法

中国では2015年11月、日本では2016年1月に質問紙によって調査を実施した。調査は講義終了後を利用して一斉に配布し、その場で回収した。配布にあわせて調査の目的、調査への協力は強制されるものではないこと、いつでも調査への協力辞退ができることを配付する前に説明した。質問紙の回答に要する時間は約30分程度であった。

3 結果

3-1 日本人大学生の親子間コミュニケーション尺度の因子構造

父子間の因子構造：まず、日本人大学生において回答に不備のあったものを除き268名分の回答を用いた。分布の偏りが顕著な項目を除いた9項目を用い、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移、ならびに因子の解釈可能性から2因子が最も適切な因子数と判断した。共通性が極端に低い項目、各因子の因子負荷が0.3よりも小さい項目と、2つ以上の因子に0.3以上の因子負荷を示す項目を除外し、最終的に5項目を用いて再度因子分析を行った。この時の回転前の累積説明率は67.26%であった。回転後の因子負荷量を表1に示した（以下、全ての図表は筆者作成）。

第1因子に高く負荷している項目を見ていくと、「父親は私の進路について意見を言うときに、その理由もはっきりと言う」など、他人に対して自分自身の意見や視点をはっきり伝えること、または自他の相違を表明することで構成されることから、「独自性」と命名した。次に、第2因子には「父親は私のやりたいことをちゃんと理解したようだ」など他人の意見に対する同意や認め、さらに尊重し結びつきの感覚を示したことから応援してくれる気持ちを感じられることで、「結合性」と命名した。各因子の α 係数を算出したところ、第1因子から順に $\alpha = .74$ 、 $.60$ であった。

表1. 日本人大学生の父子間コミュニケーション尺度の因子分析結果

| 質問項目 | 因子負荷量 | |
|--------------------------------------|-------------|-------------|
| | I | II |
| 1-7 父親は私の進路について意見を言うときに、その理由もはっきりと言う | .868 | .119 |
| 1-8 父親は、父自身がどうやって進路を決めてきたかについて体験を話す | .690 | -.059 |
| 1-2 父親は私のやりたいことをちゃんと理解したようだ | -.217 | .724 |
| 1-5 父親は私の入学（就職）試験について「大丈夫だよ」と励ましてくれる | .135 | .662 |
| 1-9 父親は最終的に私が決めた進路を応援してくれる | .112 | .395 |
| | 因子相関行列 | I |
| | | II |
| | | -.007 |

母子間の因子構造：まず、日本人大学生において回答に不備のあったものを除き268名分の回答を用いた。分布の偏りが顕著な項目を除いた9項目を用い、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移、ならびに因子の解釈可能性から2因子が最も適切な因子数と判断した。共通性が極端に低い項目、各因子の因子負荷が0.3よりも小さい項目と、2つ以上の因子に0.3以上の因子負荷を示す項目を除外し、最終的に5項目を用いて再度因子分析を行った。この時の回転前の累積説明率は66.46%であった。回転後の因子負荷量を表2に示した。

第1因子に高く負荷している項目を見ていくと、「母親は最終的に私が決めた進路を応援してくれる」など、他人の意見に対する同意や認め、さらに尊重し結びつきの感覚を示したことから応援してくれる気持ちを感じられることで、「結合性」と命名した。次に、第2因子には「母親は私の進路について意見を言うときに、その理由もはっきりと言う」など他人に対して自分自身の意見や視点をはっきり伝えること、または自他の相違を表明することで構成されることから、「独自性」と命名した。各因子の α 係数を算出したところ、第1因子から順に $\alpha = .80$ 、 $.68$ であった。

表 2. 日本人大学生の母子間コミュニケーション尺度の因子分析結果

| 質問項目 | 因子負荷量 | |
|--|--------------|-------------|
| | I | II |
| 3-1 母親は私の進路について意見を言うときに、その理由もはっきりと言 う | 1.029 | -.059 |
| 3-4 母親は、進路について「どうしてそうしたいの」と私に理由を聞く | .832 | .074 |
| 3-7 母親は最終的に私が決めた進路を応援してくれる | -.031 | .975 |
| 3-8 母親は私のやりたいことをちゃんと理解したようだ | .187 | .569 |
| 3-9 母親は私の入学(就職)試験について「大丈夫だよ」と励ましてくれる | -.043 | .396 |
| 因子相関行列 | I | |
| | II | .519 |

3-2 日本人大学生の他者志向的動機づけ尺度の因子構造

まず、日本人大学生において回答に不備のあったものを除き 268 名分の回答を用いた。分布の偏りが顕著な項目を除いた 25 項目を用い、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移、ならびに因子の解釈可能性から 4 因子が最も適切な因子数と判断した。共通性が極端に低い項目、各因子の因子負荷が 0.3 よりも小さい項目と、2 つ以上の因子に 0.3 以上の因子負荷を示す項目を除外し、最終的に 14 項目を用いて再度因子分析を行った。この時の回転前の累積説明率は 59.29%であった。回転後の因子負荷量を表 3 に示した。

第 1 因子に高く負荷している項目を見ていくと、「モチベーションが下がったときに、『周りの人のため』というのを支えにすることがある」などから、「他者志向的動機の優先（以下、他者優先）」と命名した。第 2 因子には『『周りの人のために頑張る』』というのは、『失敗できない』という過度のプレッシャーを生むことになる」、「結果がでないと『申し訳ない』と思ってしまう負担である」などから、「他者志向的動機の否定的認知（以下、他者否定）」と命名した。第 3 因子には「結局は『自分のため』にという風に考えられないと高いモチベーションをもって取り組むことは難しい」という項目から構成されることから、「自己志向的動機の優先（以下、自己優先）」と命名した。第 4 因子には『『周りの人のため』は『周りの人が喜ぶと自分も嬉しいから頑張る』』ということである」などから、「自己・他者志向的動機の統合（以下、自他統合）」と命名した。各因子の α 係数を算出し、第 1 因子から順に $\alpha = .89$ 、 $.84$ 、 $.78$ 、 $.71$ であった。

表3. 日本人大学生の他者志向的動機づけ尺度の因子分析結果

| 質問項目 | 因子負荷量 | | | |
|---|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | I | II | III | IV |
| 2-4モチベーションが下がったときに、「周りの人のため」というのを支えにすることがある | .857 | -.121 | .132 | -.088 |
| 2-26「周りの人のために」という方が頑張りやすい | .621 | .178 | -.171 | .087 |
| 2-8「周りの人のために頑張っている」と思うことによって、「自分のために頑張っている」と思うよりも甘えがなくなると思う | .499 | .023 | -.085 | .156 |
| 2-28周りの人のために頑張ることは、自分の深い次元での喜びが生まれるということだと思う | .419 | .117 | .002 | .261 |
| 2-21「周りの人のために頑張る」というのは、「失敗できない」という過度のプレッシャーを生むことになる | .060 | .771 | .041 | -.078 |
| 2-11「周りの人のために頑張る」という考え方は、結果がでないと「申し訳ない」と思ってしまう負担である | -.038 | .605 | .021 | -.068 |
| 2-19「周りの人のために」に頑張るというのは、周りの人の期待がなくなった時、やる気がうせてしまうのではないかと思う | -.130 | .518 | .068 | .199 |
| 2-17「周りの人のために頑張る」ということは「自分のために頑張る」という考えに比べてハイリスク、ハイリターンだと思う | .085 | .493 | -.009 | -.106 |
| 2-29結局は「自分のため」という風に考えられないと高いモチベーションをもって取り組むことは難しい | .178 | -.017 | .948 | -.040 |
| 2-16「自分のため」を優先にした方がいいと思う | -.244 | -.006 | .453 | .037 |
| 2-39自分のために頑張るというやり方でなければ自分を上昇させられない | .032 | .041 | .449 | .043 |
| 2-50「周りの人のために」でいう「周り」はあくまで支えであり、目的とはなり得ないと思う | -.186 | .179 | .326 | .145 |
| 2-37周りの人のためには周りの人が喜ぶと自分も嬉しいから頑張るといことである | .079 | -.120 | .015 | .847 |
| 2-46応援してくれる人のために頑張るとい感情は、その人の喜ぶ顔、仕草が見たいからという思いと、ほぼ重なるものである | .057 | -.005 | .082 | .529 |
| | 因子相関行列 | I | II | III |
| | II | .377 | | |
| | III | -.227 | .225 | |
| | IV | .591 | .586 | .060 |

3-3 中国人大学生の親子間コミュニケーション尺度の因子構造

父子間の因子構造：まず、回答に不備のあったものを除き 201 名分の回答を用いた。分布の偏りが顕著な項目を除いた 9 項目を用い、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移、ならびに因子の解釈可能性から 2 因子が最も適切な因子数と判断した。共通性が極端に低い項目、各因子の因子負荷が 0.3 よりも小さい項目と、2 つ以上の因子に 0.3 以上の因子負荷を示す項目を除外し、最終的に 5 項目を用いて再度因子分析を行った。この時の回転前の累積説明率は 55.67% であった。回転後の因子負荷量を表 4 に示した。

第 1 因子に高く負荷している項目を見ていくと、「父親は『将来こんな職業について欲しい』

と言う」など、他人に対して自分自身の意見や視点をはっきり伝えること、または自他の相違を表明することで構成されることから、「独自性」と命名した。次に、第2因子には「父親は最終的に私が決めた進路を応援してくれる」など他人の意見に対する同意や認め、さらに尊重し結びつきの感覚を示したことから応援してくれる気持ちを感じられることで、「結合性」と命名した。各因子の α 係数を算出したところ、第1因子から順に $\alpha = .76$ 、 $.71$ であった。

表4. 中国人大学生の父子間コミュニケーション尺度の因子分析結果

| 質問項目 | 因子負荷量 | |
|--------------------------------------|-------------|-------------|
| | I | II |
| 1-4 父親は「将来こんな職業について欲しい」と言う | .851 | -.134 |
| 1-1 父親は私の進路について「あなたはこれに向いている」と言う | .588 | -.004 |
| 1-7 父親は私の進路について意見を言うときに、その理由もはっきりと言う | .585 | .177 |
| 1-9 父親は最終的に私が決めた進路を応援してくれる | -.116 | .768 |
| 1-5 父親は私の入学（就職）試験について大丈夫だよと励ましてくれる | .289 | .449 |
| | 因子相関行列 | I |
| | | II |
| | | .244 |

母子間の因子構造：まず、回答に不備のあったものを除き 201 名分の回答を用いた。分布の偏りが顕著な項目を除いた 9 項目を用い、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移、ならびに因子の解釈可能性から 2 因子が最も適切な因子数と判断した。共通性が極端に低い項目、各因子の因子負荷が 0.3 よりも小さい項目と、2 つ以上の因子に 0.3 以上の因子負荷を示す項目を除外し、最終的に 6 項目を用いて再度因子分析を行った。この時の回転前の累積説明率は 58.89%であった。回転後の因子負荷量を表 5 に示した。

第1因子に高く負荷している項目を見ていくと、「母親は『将来こんな職業について欲しい』と言う」など、他人に対して自分自身の意見や視点をはっきり伝えること、または自他の相違を表明することで構成されることから、「独自性」と命名した。次に、第2因子には「母親は私の入学(就職)試験について『大丈夫だよ』と励ましてくれる」など他人の意見に対する同意や認め、さらに尊重し結びつきの感覚を示したことから応援してくれる気持ちを感じられることで、「結合性」と命名した。各因子の α 係数を算出したところ、第1因子から順に $\alpha = .80$ 、 $.61$ であった。

表5. 中国人大学生の母子間コミュニケーション尺度の因子分析結果

| 質問項目 | 因子負荷量 | |
|--------------------------------------|-------------|-------------|
| | I | II |
| 3-2 母親は「将来こんな職業について欲しい」と言う | .820 | .043 |
| 3-1 母親は私の進路について意見を言うときに、その理由もはっきりと言う | .758 | -.009 |
| 3-3 母親は私が意見を言っている途中なのに、「でも…」と遮って反論する | .667 | -.133 |
| 3-5 母親は私の進路について「あなたはこれに向いている」と言う | .584 | .043 |
| 3-9 母親は私の入学(就職)試験について「大丈夫だよ」と励ましてくれる | .030 | .994 |
| 3-7 母親は最終的に私が決めた進路を応援してくれる | -.075 | .452 |
| | 因子相関行列 | I |
| | | II |
| | | .161 |

3-4 中国人大学生の他者志向的動機づけ尺度の因子構造

まず、回答に不備のあったものを除き 201 名分の回答を用いた。分布の偏りが顕著な項目を除いた 25 項目を用い、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移、ならびに因子の解釈可能性から 4 因子が最も適切な因子数と判断した。共通性が極端に低い項目、各因子の因子負荷が 0.3 よりも小さい項目と、2 つ以上の因子に 0.3 以上の因子負荷を示す項目を除外し、最終的に 13 項目を用いて再度因子分析を行った。この時の回転前の累積説明率は 61.12% であった。回転後の因子負荷量を表 6 に示した。

第 1 因子に高く負荷している項目を見ていくと、「モチベーションが下がったときに、『周りの人のため』というのを支えにすることがある」などから、「他者志向的動機の優先」と命名した。次に、第 2 因子には「『周りの人のため』は『周りの人が喜ぶと自分も嬉しいから頑張る』ということである」などから、「自己・他者志向的動機の統合」と命名した。第 3 因子には「『周りの人のために頑張る』というのは、『失敗できない』という過度のプレッシャーを生むことになる」などから、「他者志向的動機の否定的認知」と命名した。第 4 因子には「『周りの人のために』でいう『周り』はあくまで支えであり、目的とはなり得ないと思う」などから、「自己志向的動機の優先」と命名した。各因子の α 係数を算出したところ、第 1 因子から順に $\alpha = .83, .81, .72, .70$ であった。

表 6. 中国人大学生の他者志向的動機づけ尺度の因子分析結果

| 質問項目 | 因子負荷量 | | | |
|---|-------------|--------------|-------------|-------------|
| | I | II | III | IV |
| 2-4モチベーションが下がったときに、「周りの人のため」というのを支えにすることがある | .817 | -.076 | -.127 | .007 |
| 2-8「周りの人のために頑張っている」と思うことによって、「自分のために頑張っている」と思うよりも甘えがなくなると思う | .517 | .091 | .112 | -.131 |
| 2-10周りの人が喜ぶことで自分の存在意義を感じることもある | .351 | .245 | .160 | -.086 |
| 2-28周りの人のために頑張ることは、自分の深い次元での喜びが生まれるということだと思う | .316 | .013 | .004 | .176 |
| 2-37「周りの人のため」は「周りの人が喜ぶと自分も嬉しいから頑張る」ということである | -.059 | 1.051 | -.051 | -.009 |
| 2-2周りの人のために頑張ったとしても、その人が喜んでくれることが、結局は自分の満足感につながるものである | .157 | .384 | -.019 | -.017 |
| 2-21「周りの人のために頑張る」というのは、「失敗できない」という過度のプレッシャーを生むことになる | -.083 | -.001 | .661 | -.037 |
| 2-19「周りの人のために」に頑張るというのは、周りの人の期待がなくなった時、やる気がうせてしまうのではないかと思う | .016 | -.086 | .567 | -.074 |
| 2-14「周りの人のために頑張る」ということは、「人からよく思われたい」「人の期待を裏切って悪く思われたくない」という思いにつながる | .005 | -.019 | .428 | .193 |
| 2-7「周りの人のために頑張る」という言い方は、周りの人にとって自分が意味ある存在であることを確認したいという気持ちがあるように思える | .081 | .094 | .367 | .162 |
| 2-50「周りの人のために」でいう「周り」はあくまで支えであり、目的とはなり得ないと思う | -.109 | .083 | -.045 | .673 |
| 2-16「自分のため」を優先にした方がいいと思う | .009 | -.128 | .058 | .508 |
| 2-39自分のために頑張るというやり方でなければ自分を上昇させられない | .295 | .059 | -.050 | .383 |
| | 因子相関行列 | I | II | III |
| | II | .547 | | |
| | III | .493 | .375 | |
| | IV | .360 | .449 | .308 |

3-5 親子間のコミュニケーションと自己・他者志向的動機づけとの相関

両親のコミュニケーションの特徴と自己・他者志向的動機づけの関連を検討するために父親・母親それぞれについて、親子間コミュニケーション尺度の2つの下位尺度と自己・他者志向的動機づけの4つの下位尺度の相関係数を求めた。日本人大学生では、父親の独自性は親子間のコミュニケーションの間で有意な相関はなかった。父親の結合性は親子間のコミュニケーションの4つの下位尺度と正の相関があった。母親の独自性は自己優先と弱い正の相関があった。母親の結合性は自己優先と弱い正の相関があった。また、中国人大学生では、父親の独自性は他者優先、他者否定、自他統合と正の相関があり、自己優先と弱い正の相関があった。父親の結合性は他者優先と自他統合と正の相関があり、自己優先と他者否定と弱い正の相関があ

った。母親の独自性は他者優先と自己優先と他者否定と正の相関があった。母親の結合性は他者優先と自己優先と自他統合と正の相関があり、他者否定と弱い正の相関があった(表7参照)。

表7. 親子間のコミュニケーションと自己・他者志向的動機づけとの相関係数

| | 他者志向的動機 の優先 | | 自己志向的動機 の優先 | | 他者志向的動機 の否定的認知 | | 自己・他者志向的 動機の統合 | |
|-----|----------------|-------|----------------|-------|-------------------|-------|-------------------|-------|
| | 日本 | 中国 | 日本 | 中国 | 日本 | 中国 | 日本 | 中国 |
| 父独自 | .11 | .27** | .06 | .14* | .07 | .31** | .07 | .19** |
| 父結合 | .21** | .33** | .20** | .15* | .17** | .15* | .24** | .27** |
| 母独自 | .06 | .20** | .14* | .23** | .11 | .38** | .07 | .10 |
| 母結合 | .05 | .27** | .19* | .22** | -.03 | .16* | .11 | .26** |

* $p < .05$ ** $p < .01$

3-6 親子間のコミュニケーションが他者志向的動機づけに対する影響について

他人に対して自分自身の意見や視点をはっきり伝えること、または自他の相違を表明することを表す独自性と他人の意見に対する同意や認め、さらに尊重し結びつきの感覚を示したことから応援してくれる気持ちを感じられることを表す結合性が青年の他者志向的動機づけに及ぼす影響について検討するために、父親と母親の独自性と結合性得点および性別のダミー変数を説明変数、他者志向的動機づけ尺度の各下位尺度を目的変数とする重回帰分析を日本と中国それぞれのデータについて行った。その結果、日本において父親の結合性得点の高さが他者優先及び自他統合を予測しており、父親が青年に対して尊重し応援を示すことで他者志向的動機づけが獲得されやすかった。また、両親の結合性の高さが自己優先を予測していた。両親の結合性の高さは他者否定を予測していたが、父親は正の影響に対して、母親は負の影響を与えていた。つまり自己志向的動機づけには、父親が青年を尊重し応援的な態度で接すること、母親は非受容的な態度を示すことが、それぞれつながっていた。

また、中国において父親の独自性の高さと両親の結合性の高さが他者優先を予測しており、父親が青年に対して自分自身の意見や視点をはっきり伝えるとき、両親が尊重し応援的な態度で接するときに他者志向的動機づけを獲得されやすかった。また、母親の独自性の高さと結合性の高さが自己優先を予測しており、母親が青年に対して尊重し応援的な態度と自身の要求を明示する態度で接するときに、青年が自己志向的動機づけを獲得されやすかった。また、両親の独自性の高さが他者否定を予測しており、両親が青年に対して自分自身の意見や考えをはっきり伝えるとき、他者に対して否定的な認知の動機づけが獲得されやすかった。また、両親の結合性の高さが自他統合を予測しており、両親が尊重し応援的な態度で青年に認知されるとき

に、青年は自己志向的動機づけと他者志向的動機づけを統合しやすかった（表 8 参照）。

表 8. 親のコミュニケーションを説明変数とした重回帰分析

| | 他者志向的動機 の優先 | | 自己志向的動機 の優先 | | 他者志向的動機 の否定的認知 | | 自己・他者志向的 動機の統合 | |
|---------|----------------|--------|----------------|--------|-------------------|--------|-------------------|--------|
| | 日本 | 中国 | 日本 | 中国 | 日本 | 中国 | 日本 | 中国 |
| 父独自 | | .16** | | | | .19*** | | |
| 父結合 | .22*** | .23*** | .14** | | .19*** | | .24*** | .17** |
| 母独自 | | | | .19*** | | .31*** | | |
| 母結合 | | .17** | .13** | .17** | -.15** | | | .18** |
| 性別 | | | | | | | | |
| 調整済み R2 | .04*** | .17*** | .04*** | .08*** | .04*** | .19*** | .06*** | .10*** |

** $p < .01$ *** $p < .001$

4 考察

本研究の目的は、日本と中国において、両親とのコミュニケーションの特徴が青年の他者志向的動機づけに対する影響を明らかにすることであった。結果について、分析別に考察する。

まず、因子分析の結果では、他者志向的動機づけにおいて、日本および中国では4つの因子が抽出された。また、それぞれの因子の項目は日中間でほぼ対応できたため、因子構成において日中で違いが見られなかった。続いて、相関分析の結果から見ると、他者志向的動機づけの4つの下位尺度において、日本より中国のほうが両親の影響は強いことを示唆された。

そして、重回帰分析の結果から見ると、日本では、父親の結合性が「他者志向的動機づけの優先」、及び「自己志向的動機づけと他者志向的動機づけの統合」を予測していた。つまり、青年との結びつきを示すコミュニケーションを取る父親を持つ場合に青年が他者のために頑張るという気持ちを強めることを示唆した。一方、中国では、両親の独自性と結合性が「他者志向的動機づけの優先」、及び「自己志向的動機づけと他者志向的動機づけの統合」を予測した。つまり、青年との結びつきを示すコミュニケーションを取る両親と青年に対して自他の違いや、自分の意見を明示する両親を持つ場合に青年が他者のために頑張るという気持ちを強めることを示唆した。この結果から、日本より中国のほうが父親の独自性と母親の独自性及び結合性が青年の「他者志向的動機づけの優先」と「自己志向的動機づけと他者志向的動機づけの統合」に対する影響が強いことを示唆された。また、伊藤（2010）は、母親の受容性が高いほど、他者志向的動機づけの優先、あるいは他者志向的動機づけと自己志向的動機づけを統合する傾向が強くなることが示唆されていたが、本研究の結果から、日本の父親は青年の動機づけに母親

以上の影響力があると考えられた。それは、父親は母親よりも青年の心理的健康へ重大な影響を及ぼすことを報告した先行研究からうかがわれる（中川ら, 2005 ; 孫, 2011 ; Shek, 1999）。また、Shek (1999) は両親の相違について、父親は子どもと交流する機会は母親より少ないが、家族の伝統的な役割として、母親以上の権威を持つ傾向があるため、父親の子どもに対する行為は子どもにとって影響力がより強い可能性があるとして指摘した。また、日本では両親の結合性が「自己志向的動機づけの優先」を予測していた。それに対して、中国では、母親の独自性と結合性が「自己志向的動機づけの優先」を予測していた。そして、日本では両親の結合性が「他者志向的動機づけに対して否定的な認知」を予測していた。それに対して、中国では、両親の独自性から予測した。また、日本の父親の結合性は、「他者志向的動機づけの優先」のほか、残りの3つの動機づけに全て有意な偏回帰係数を得られたことから、父親の結合性は「他者志向的動機づけ」を促進する一方で、その否定的認知も促進しており、他者志向的動機づけに対するアンビバレントな影響を与えていると考えられる。中国における母親の独自性の「他者志向的動機づけに対して否定的な認知」の偏回帰係数は.31**であることから、母親の独自性に属する言動は中国の青年に対する影響の重要性が反映されている。

本研究は、親とのコミュニケーションの独自性と結合性を説明変数として、青年の他者志向的動機づけに対する影響を検討した。重回帰分析の結果では、親の独自性と結合性の両方は他者志向的動機づけに影響を与えることを得られた。特に両親の結合性は自己志向的動機づけと他者志向的動機づけの統合を予測することは、伊藤 (2010) の研究を支持する結果となった。また、日中比較については、本研究では他者志向的動機づけに対して中国の両親の独自性は日本より有意な結果が得られたことから、同じ文化圏内における日中両国でも、相互独立的自己観において相違が見られる知見を得たと言えるだろう。

最後に本研究の限界についてまとめる。まず、本研究で収集したデータは、親から青年に対するコミュニケーションについての青年の認知である。コミュニケーションである以上、青年から親に対するコミュニケーションも検討する必要があると考えられる。第2に、今回の研究では、独立変数である親のコミュニケーションの特徴はあくまでも青年が認知したものであるため、親の視点から集めたデータを用いて検討する必要があると考えられる。

<引用文献>

東洋 (1981) 『母親の態度・行動と子どもの知的発達』、東京大学出版会

東洋 (2012) 『日本人のしつけと教育』、東京大学出版会

Cooper, C.R., & Grotevant, H.D. (1987), "Gender issues in the interface of family experience and adolescents' friendship and dating identity" *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 247-264

Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. (1986), "Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence" *Human Development*, 29, 82-100

親との関わりが日中大学生の他者志向的動機づけに与える影響（周子康）

- 平井賢二・久世敏雄・大野久・長峰伸治（1999）「青年期後期の親子間コミュニケーションの構造に関する研究—個性化モデルの視点から—」、『青年心理学研究』、11、19-36
- 平井賢二（2000）「青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識、アイデンティティとの関連」、『家族心理学研究』、14、41-59
- 井上忠典（1995）「大学生における親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連について」、『筑波大学心理学研究』、17、163-173
- 伊藤忠弘（2010）「他者志向的達成動機の規定因としての親の養育態度と期待」、『青山心理学研究』、10、1-16
- 伊藤忠弘（2011）「他者志向的達成動機と親の期待内容および期待観の関係」、『青山心理学研究』、11、11-21
- 伊藤忠弘（2012）「達成動機への態度とボランティア活動の動機」、『学習院大学研究年報』59、79-97
- 伊藤忠弘（2014）「感謝を感じる経験と感謝される経験における感情」、『学習院大学文学部研究年報』、61、99-117
- 鹿毛雅治（2012）『モチベーションをまなぶ12の理論』、金剛出版
- 北山忍・唐澤真弓（1995）「自己—文化心理学の視座」、『実験社会心理学研究』、35(2)、133-163
- Markus H.R., & Kitayama, S. (1991), "Culture and the self: Implications for cognition, motivation, and emotion" *Psychological Review*, 98, 224-253
- 真島真里（1995）「学習動機づけと「自己概念」」、東洋（編）、『現代のエスプリ 333 意欲 やる気と生きがい』、至文堂、123-137
- 宮本美紗子（1981）『やる気の心理学』、創元社
- 中川明仁・佐藤豪（2005）「完全主義と認知された養育態度および精神的健康との関係」、『同人社心理』、52、16-25
- 中野良哉（2013）「学生の学習動機づけに影響を及ぼす要因—進路決定時の親の関わりと進路自己決定性—」、『理学療法科学』、28(4)、551-556
- Shek, D. T. L. (1999), "Paternal and maternal influences on the psychological well-being of Chinese adolescents" *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, 125(3), 269-296
- 孫逸舒（2011）「両親の過度の期待と青年の抑うつ傾向：日本と中国における比較研究」、『人間文化創成科学論業』、13、237-245
- 高橋彩（2008）「男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連」、『パーソナリティ研究』、16(2)、159-170
- 高田利武（1997）「中国における文化的自己観—一日中の比較—」、『総合研究所所報』、5、3-13
- 矢崎裕美子（2005）「短大生・大学生の進路選択における他者からの期待の認知について：自由記述の分析結果」、『日本教育心理学会総会発表論文集』、47(0)、93

主指導教員（一柳智紀准教授）、副指導教員（中島伸子准教授・杉澤武俊准教授）